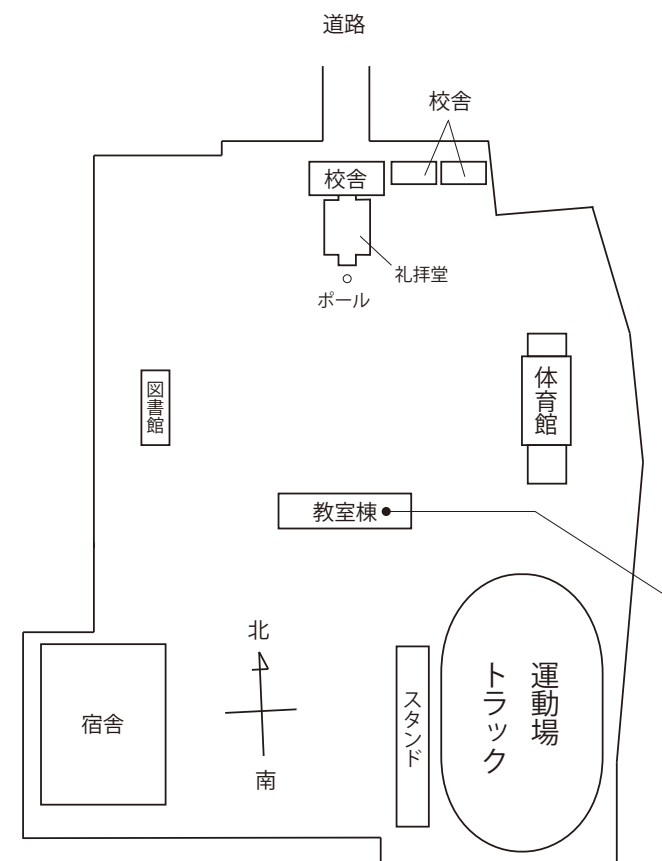


II - 2

北京・崇貞学園 崇貞学園のその後

接收後の変遷

日本の敗戦後に接收された崇貞学園の校地は1万4,000坪、建物は22棟に及んだという。崇貞学園の校舎の配置は、正門から入って中央に礼拝堂、左に体育館、右に図書館、礼拝堂に向かいあう形で生徒たちの学び舎である教室棟が配置されていて、主な建物は、1936年以降に建てられたものであった。接收により、そのすべてが中国側に移管された。1945年11月8日の接收同日、崇貞学園中学部は北平第四中学校と名称変更され、在校生はそのまま引き継がれた。同校は1949年3月に北京市第四中学校と改称した。同校は、1967年朝陽中学と改称するとともに、男女共学校となり、83年には、「老実、宜強、勤勉、創新」を同校の教育指針に据えた。さらに、1991年には、北京市陳経綸中学となって現在に至っている。校舎は1980年代までほぼそのままの姿で使用されていたが、90年代に入り新築された。現在の陳経綸中学では、崇貞学園を創立した清水安三と美穂を記念し、胸像及び記念碑を校庭に設置しており、また、正門上部の裏面には「崇貞学園」の文字が刻まれている。



■ 接收された校地と主な校舎の配置図

礼拝堂・図書室（33頁）・体育館（33頁）・教室棟などの校舎の配置は、安三と郁子が徳・智・体の調和的発達を目指すリベラルアーツ教育のシンボリック的意味を含意している。



■ 朝陽中学校門
(1986年8月)
訪問した1986年
8月撮影と推測。



■ 教室棟 老実館（1986年）

1986年に桜美林学園の教職員研修会で朝陽中学を訪問した時の撮影。1939年の建築、崇貞学園の時代から主として教室として使用。



■ 学校史のポスターセッション（2011年）

2011年、陳経綸中学で開催された「創立90周年」記念祝賀会会場における崇貞学園から始まる沿革の展示。



■ 陳経綸中学正門（上）と崇貞
学園と刻まれた正門裏面（右）



■ 清水安三の胸像

陳経綸中学の校庭に設置されている。

II-2

北京・崇貞学園
崇貞学園のその後

交流と継承

桜美林学園創設当初から、崇貞学園の日本人部の卒業生たちは安三・郁子を慕ってしばしば同窓会を開催するなど、交流を重ねていた。また、1970年夏、安三がソウルで開催されたキリスト教信徒大会に参加して韓国人卒業生たちとの再会を果たした。一方、1986年、桜美林教職員は研修会の一環として、朝陽中学を訪問し、崇貞学園時代の校舎がほぼそのまま活用されていることを確認、交流が始まった。その後、桜美林学園は、安三・郁子の生誕百年祭（1992年）を開催して、中国・韓国・日本の卒業生たちを招き、崇貞時代をしのぶ時を共有した。桜美林学園60周年祝賀会（2006年）においても、中国・韓国の卒業生が来日して交流の機会をもった。それらの公式行事での交流のほか、崇貞時代の卒業生が来日して、当時の学校生活を現代の学生たちに語り伝える、あるいは中国・韓国に出向き卒業生たちに聞き取りを行うなどの交流を通じて、崇貞学園時代からの建学の精神を継承する活動が行われてきた。現在、陳経綸中学では、本学園と同様の教育目標「学而事人」を掲げている。



■ 安三を囲む韓国の卒業生たち（1970年8月29日）
1970年8月29日、ソウル秘苑で再会したときの懇談の一時。



■ 「創立者 清水安三・郁子両先生生誕100年祝賀会」（1992年6月）
崇貞学園の卒業生たちが中国、韓国、国内から桜美林学園に集まり、交流を深めた。前列中央清水長三。



■ 桜美林学園創立60周年祝会での日本・韓国・中国の卒業生（2006年）
2006年、帝国ホテルの会場で紹介された左から川上奈穂・朴世玉・魏玉琮・玄次俊。



■ 講演会「戦時下の崇貞学園での教育体験」での講演者 玄次俊（2012年5月24日）
崇貞学園卒業生を招いての講演会をたびたび開催。



■ 聞き取りに応じる中国人卒業生 孫英（2015年10月）

北京にて。聞き手は李恩民。桜美林学園では、崇貞学園の教育実践や安三・郁子の中国での活動を明らかにしたいと、中国・韓国を訪問して聞き取り調査を進めてきた。



■ 等身大の安三の看板前の卒業生 玄次俊（左）と魏玉琮（右）（2010年5月）
陳経綸中学「創立90周年記念祝賀会」での再会。



■ 美穂の記念碑と韓国の卒業生が植樹したムクゲ

桜美林学園内のメモリアルパークに植えられている。安三は崇貞学園の校庭に咲き誇るタチアオイの花を指して、ムクゲが韓国の国花であることを教えたという。



■ 陳経綸中学校庭内の「学而事人」石碑